

中島直人 ——あるハワイ日系二世作家の生涯と作品——

桑 垣 孝 平

(一) はじめに

中島直人（なかしま なおと^①、一九〇四～四〇年）は、あまり知られぬ稲門の作家である。日系二世としてハワイに生まれ育ち、十三歳の時に来日、両親の故郷である熊本にて補習科に通った後、旧制中学校、早稲田大学予科、早稲田大学で学び、学生時代から十年近く、日本にて、日本語で創作活動を行った。来日直後よりハワイへの望郷の念を抱き、文壇では中堅の評価を受けつつ、一九三六年末、唯一の著書『ハワイ物語』^③の刊行をきっかけに、帰布。当初は再び日本に戻るつもりだったが、結局、当地で結婚し、さらにはアメリカ本土にて日本語学校校長の職を得、最期は交通事故で亡くなった。生前、川端に高く評価された他、ハワイの日系コミュニティでは母国の文壇に分け入った唯一の二世作家としてよく知られ、邦字新聞で度々連載も持った。^④

直人^⑤の作品を今の目で読むと、大変興味深い。移民文学が世界文学の潮流の一つとなって久しいが、日本におけるその先駆けと言えるのではないか。直人は「思い出の作家」であった。『ハワイ物語』収録作は概ね全て、彼がハワイで過した少年時代を題材としている。この他、同人誌や新聞を中心に多くの作品を発表したが、それらもやはり、

ハワイ或いは日本での自身の経験を自伝的に綴ったものが目立つ。しかし、直人の描く卑近な出来事の向こうには、近代化という大きな物語が常に響いている。戦中、日系人たちが特異な歴史を引き受けることになった過去はよく知られている。その集合的な経験を、具体的な手触りを伴った日本語小説にできる作家は、直人の他にいなかったと思われる。早逝が残念でならない。

直人に関する研究は、多くない。最初に彼を中心的に扱ったのは、日比嘉高である。⁶ 直人を発掘した事そのものの成果がまず極めて大きい。日比は今や残存数の少ない『ハワイ物語』を『コレクション・モダン都市文化』⁷に復刊するという重要な仕事もしている。日比以外の研究は長らく出なかったが、近年、黒田俊太郎が直人の初期作の一つ「布哇生まれの感情」について書き、同作に新たな読解を加えた。⁸ しかし、管見の限り、直人の伝記的情報と作品書誌については、未だ簡潔なものが呈示されるに留まっている。直人は一体、どんな生涯を送り、どんな作品を書いたのだろうか。前述の通り、直人の作品には自伝的なものが多く、また、ハワイ当地では彼の人生がしばしば邦字新聞で取り上げられた。本論では、それらを手掛かりに直人の人生と作品を改めて振り返ってみたい。併せて、館蔵の自筆資料も紹介する。

(一) その生涯と作品

◆一九〇四〜一九一七年　〇〜十三歳　(一)　出自　——「チャキくの布哇っ子」——

直人は一九〇四年四月二十日、オアフ島のワイパフに生まれた。六人きょうだいの三番目である。兄が一人、姉が一人、妹が二人、末に弟が一人いる。両親が熊本県鹿本郡稲田字小島から渡布したのは、一九〇二年五月である。父直彦は一八六八年九月一日生まれで、当時三十三歳。母のコマは、一八七四年八月十日生まれで、当時二十八歳。二

人はまだ一歳だった長女マルエを連れていた。マルエは一九〇一年九月一日生まれである。一家は五月十五日に渡布しており、九日に入港したコプテック号に乗船していたものと推察される。マルエの上には、後に直人の渡日のきっかけとなる、長男茂がいる。茂は一八九七年八月十日生まれで、両親の渡布時、五歳だったが、日本に残された。父直彦と母コマはまずワイパフ耕地で働いた後、直彦は野菜などの行商をし、コマはキャンプで豆腐や油揚げなどを売った。一九〇四年四月二十日に直人が生まれた後、一九〇七年六月一日に次女ヨシ子が生まれている⁹⁾。

直人の持つ最初の記憶は、出生地ワイパフである。パールハーバーに遠くない場所にある。後に触れるが、日本の十年近い作家生活の後、直人は念願の帰布を果たし、邦字新聞『日布時事』にて、随筆「歲月は流れたり」を連載する。その第二回で、幼少期の記憶について、以下のように記している¹⁰⁾。「私はワイパフで生まれ、ワイアワで育ち、ポールシチーで大部分の学校生活を持ったものである。ワイパフでは三つのときに豆腐屋をしてゐた母親の背中にいたことから最初の記憶が始まり、あとは淡い断片で、自分自身を強く意識し始めたのは六つか七つの頃にワイアワへ移ってからで、ポールシチの学校生活では私はある意味の青春を送つたとさえ思つている」。

また、こちらも後に触れるが、直人はキャリアの最初期に、同じく『日布時事』にて、創作「帰つて来た私達」を連載している。この連載中、同紙に涼花老人なる人物から「布哇出身の青年文士は／お亀さんの息子／「帰つて来た私達」を読んで／三十年前の追懐」と題された手記が寄稿される¹¹⁾。同記事には、父直彦が県立師範学校の出で、郷里で教鞭を執っていた「実に温厚の聖人君子」であつたことや、母コマが「其腕と芸と気品とで当時一流の芸者として名高かつた」こと、「得意とする熊本のオケンケ節、キンキラキン節」等をハワイ現地の有力者たちに伝授したことなどが見える。「お亀さん」は芸名のようなものである。直人については「予は何時も直さん／と呼んでいた(…)直さんは非常に伶俐な子で色が白く孰れかと言へばお父さんに似ていた上秀才で当時五六歳かソコらだと思つて居ま

す(…)もしあの中島くんであつたらチャキ〜の布哇つ子です」とある。

◆一九〇四〜一九一七年 〇〜十三歳(二) 少年時代

その後、一家はワイアワへ移る。¹²⁾以降の直人の少年時代が、ハワイを舞台にした一連の短編の主たる題材となる。ワイアワもパールハーバー近郊である。先に引いた「歳月は流れたり」には、引越しは直人が六歳か七歳だった時とあるので、一九一〇年頃である。この時期、三女が一九一〇年五月一日、末の弟が一九一四年九月三日に生まれてい¹³⁾る。また、一九一四年には、兄茂が来布する。しかし、茂はハワイでの生活に馴染めず、三年後の一九一七年に、線路に飛び込み、亡くなってしまふ。この出来事が、直人と一家の生活を大きく変えることになる。ワイアワ時代の直人の足跡の紹介も兼ね、ここで彼の代表作をいくつか紹介しておきたい。

「ワイアワ駅」

『ハワイ物語』の冒頭を飾る自伝的中編で、初出は『文学界』二巻二号(一九三四年二月)である。焦点人物はホルルのカイウラニ・スクールの七学年に進学したばかりの直人で、時代は一九一七年九月から十月頃である。作中では、新しい学校での希望に満ちた生活や、ワイアワに住む仲間たちとの交流が生き生きと活写される。しかし、同時に不穏な雰囲気常在に漂っている。その要因は、三年前に来布した兄茂である。家族一同、喜んで彼を迎えたが、結局、茂はハワイ、そして父直彦とうまく馴染めていない。茂は絵描きを志し、愛書家で、また、日本に住まう同時代の日本人たちも秘めていた意識かもしれぬが、移民たちをどこか見下している。茂はワイアワの家を離れ、あるサトウキビプランテーションのキャンプで暮らしていたところ、体調を崩し、戻ってくる。直人には不明瞭だが、精神的

な失調のようである。間もなく、直人が学校帰りに映画を見てみると、茂の訃報を知らされる。様態が急変し、家を飛び出して、列車に飛び込んだらしかった。中島家は直彦を残し、茂の遺骨を持って帰国することとなる——。

この物語において、ワイアワ駅は一つの象徴として描かれる。小説は次のように始まる。

ワイアワ駅——それはほとんど名のみで、たまに貨物列車が停つて肥料や家畜の兵糧袋を落として行く位のものであつた。

だから、その床を持つた白い砂塗りの四角な建物は、幅三間ばかりのワイアワ川の口の所で汽車を見送つてゐるだけだ。

といふより、この駅は、もはや駅の任務を忘れてワイアワ部落の中央にあつて一つの記念碑となつて了つた。

試みに、この建物の中に入つてその四つの壁を仔細に見るならば、そこには雑然ではあるが、この部落の持つて来たあらゆる姿が鉛筆、インキ、小刀、白墨その他植物の汁などで銘記されてある。¹⁴

駅の壁には、様々なゴシップが落書きされている。ワイアワの人々に関する陰口や告げ口などである。茂の死は彼自身、そして家族にとって悲劇に他ならない。しかし、ワイアワの歴史としては、落書きの一つでしかない。そして、個人の悲劇が無慈悲に累積してゆく、駅の白い壁が、ハワイ日系移民全体の悲劇として読者に迫ってくる。語り手は、中島家がワイアワを発つ際「そしてその日、入れかほりにワイアワには誰か越してくるのを見た」¹⁵と書き、ワイアワの歴史が繰り返されることを予感させながら、物語を閉じる。

「ミス・ホカノの鞭」

本作も『ハワイ物語』に収録されている中編である。初出は『新科学的文藝』一卷五号と六号で、一九三〇年十一月と十二月に上下に分けて掲載された。焦点人物はやはり直人自身である。「ワイアワ駅」の一年前、彼がポールシチ学校 (Pearl City Public School) の六学年にいた頃が題材である。ミス・ホカノは同校の二十七歳の校長である。ハワイ先住民の血を引き、エワ区裁判所の判事の娘で、プライドが高く、厳肅な性格である。また、恋多き人であり、彼女の恋愛事情は、学校に通う子供たちの真剣な話題である。というのも、うまく運ばない場合に、鞭が飛んでくるからである。ミス・ホカノは地主の息子や、サトウキビプランテーションの監督、中尉の軍人など、若い白人と次々に恋するが、成就しない。しかし、ある夕立の日の交流をきっかけに、学校の前にある「サンライズ・ソーダ・ワータ」を一人で切り盛りする、三十七歳の、決して若い白人とは言えないアルフレッドとの間に、恋が芽生える。この恋はうまく離陸する。しかし、そんな折、アルフレッドの煙草の不始末で工場が爆発してしまう。それをきっかけにアルフレッドはアメリカ本土に傷心旅行に出ることとなる。旅費一切はミス・ホカノから支援を受け、彼女とは一年で戻ると約束して――。

後に川端の評を引くが、子供たちのいるハワイの風景が一続きの織物のように鮮やかに描かれ、これは直人の作家としての持ち味の、最大のものの一つである。どこを切っても美しいが、例えば、友人から預かったラブレターを、ある女の子の家に届ける挿話。日が落ち、ガス灯が点り始める時間で、場所はベニンスラという別荘地。直人が躊躇っていると、少女は庭に出て来るが、ランタンを柱に吊り下げ、彼に気づかぬまま家に戻ってしまう。直人は仕方なく郵便受けにラブレターを入れ、歩きます。引用中の「カナカ」は先住民のこと、「マー公」はミス・ホカノの妹マーガレットで、ピアノをたしなみ、姉と違い、天真爛漫である。

(…) 幾つもの曲りをカーヴすると、微かなピアノの音が漏れ聞えて来る或る屋敷の前に立ち停つた。「オールド・ブラック・ジヨー」であつた。ウクレレでカナカ達が暢びやかな余韻をこめて歌ふ此の唄に馴染んでゐる私は、静かな夜にピアノで弾かれるそれに新らたなる感興を覚えた。さうしてさつきの私のはやつた気持は納まり掛つた。暫くその、夜目にも瞭然と見える紅色風鈴咲のハイビスカスの生垣にもたれ掛つて、そののどかなる哀愁の流れに聞き入つてゐると、突然ぱたりとピアノの音が止まつていきなり外へ向かつて、

「マー公。パパは——？」

と云ふき慣れた声が出た。

「パパ、海岸ばたの倶楽部でせう。」

妹のマーガレットらしい軽快な返事が庭でした。

そしてそれきりピアノの音も止んで、コフネ椰子の繁つた屋敷の中は森として了つた。

門札を見ると、果して「Wiley Lono Hookano」としてあつた。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

◆一九〇四〜一九一七年　〇〜十三歳（三）　文学との出会い

直人が文学に出会つたのも、ワイアワにいた頃だった。直人は、一九三一年九月一日の『東京堂月報』に「布哇と書物の回想」というエッセーを寄せている。本を読むこと、兄との関係、そして言語を獲得することについて述べた名文であるが、この中で、文学との出会いについて、次のように語っている。

私が最初に書物の面白さといふものを知つたのは、なんでも十一歳の時だと思ふ。当時私はハワイのスクール・ボーイで、西洋の公学校と日本語学校とに通つてゐたが、その少年の私に本当に素晴らしいとしみじみ思はせたのは、かの尾崎紅葉の『金色夜叉』だった。

むろん、その時、公学校の四年であつた私は学校の教室備付図書棚から『マダ・グース・ヘン』『リトル・レッド・ライデン・フッド』等のさまざまな童話を中心に淡い恋愛と取り入れたラヴ・ストーリー、その他解説沢山の科学書にそれとなく読み耽つてゐた私であつたり、日本語学校の日曜学校で僧侶である青山先生から日本の興味深い妖怪談を聞かされてはゐたが、前記の小説『金色夜叉』を読み聞かされた時は、その異様な物珍しさにむしろ驚嘆したと云つてもいい。それは、やはり、今迄私が読んだり聞いたりしたいろいろな物語よりも感情がこまやかで恐ろしく熾烈で息迫る魅力であつたのだ。此の感動は小説といふ形式を借りて、母国語の持つ美しさに接し得た喜びでもあつた。厳密に「書物の面白さ」といふ点で、最初に記憶にある所以である。(三頁)

絵描きを志し、本も好きだつた兄茂の蔵書の中にも『金色夜叉』があつた。その一冊を、ホノウリウリ(戦中、強制収容所が設置された地域)に住む「荒木さん」という父の知人が、中島家に滞在した折、読んでくれた。直人少年は魅了されるが、荒木さんは間もなく帰つてしまう。直人少年は、どうしても続きを知りたいが、自分では読めない。姉も読めない。そして、読み書きができる父には、頼めない。

父は界限でも漢字の読める方で、入口の棚の上には和英、英和おぼえ書が一、二冊上げてある程であつたが、物堅い父は私達が新聞を繰り広げる事も好まなかつた。むろん、姉なども隠れ読みであつた。従つて字の読める

父に『金色夜叉』の如きれんめんたる軟文学を荒木さんのやうに読ませる事もさういう書物が家に存在するといふ事を告げる事も全然不可であつた。(四頁)

しばらくして、荒木さんは心臓麻痺で急死してしまう。最後の頼みは兄茂であるが、親密な関係を築こうとしている内に、彼も亡くなってしまうのである。この頃、直人の母語は英語に傾こうとしていた。「(…)私は土地の公学校を卒へてホノルルのカイオラニ学校第七学年に進み、英語と日本語の均衡が益々取れなくなつて行つた」¹⁹⁾茂がホノルルの「布哇便利社」や「森重」で日本語の新刊書を漁っていた様子も描かれている。²⁰⁾茂の死後、その蔵書の半分は焼かれ、半分は遺灰と共に日本に持ち帰られることとなる。直人がそれら兄の蔵書の内実をちゃんと理解するのは、日本に渡り、日本語運用能力がある程度、身に付いた後のことである。直人は、言わば、茂の死後、その蔵書を通して、兄との関係を構築することになるのであるが、このエッセーには後ほど、改めて戻つてこよう。

◆一九一七年 十三歳 来日

茂死去の際には『日布時事』に父直彦他の署名で葬儀の御礼広告が掲載された。²¹⁾茂の死は一九一七年九月だったようである。後に直人が『文学生活』に発表した随筆「赤瓦」²²⁾の人種によれば、中島一家の帰国／来日は同年十月末で、直人は満十三歳、数えて十四歳だった。ポールシチ学校で六学年を終え、ホノルルにあるカイウラニ・スクールの七学年に進学したばかりだった。

(…)嬉しような悲しような、頭の中が何にも引つくり返されたようなぼんやりした気持で、私達が横浜に

付いたのは私の十四才のときの十月末であつた(…)母からいよいよ近づいて行く熊本の家のことなど、まるで子守唄のやうに小さいときから聞かされてゐたこの長い／＼夢の国の話の美しい最後の頁へ来たかの如く私達に云ひ聞かせるのであつた。しかし村へ来て「わが家」を見ると、私は何とも云へない悲しさに襲はれた(…)そこには壁の土は落ち竹垣は壊れ名も知らない雑草のほしいままにはびこつた一箇の廃屋があるのみだつた(…)学校に通ひだした私には、始めて経験する気候の厳しさも微笑の中で、何もかもたまたま珍しかつたが、やがて環境の相違は、私の持つ美しい夢を一枚／＼風に剥がれるやうに奪つて行つた。そして私の頭にはつきり浮かんで来たのは生れ故郷のなつかしい姿であつた。私は始めて如何に私がハワイに於いて幸福であつたかといふことを知つた(…)／＼(…)いささか運命論者めいて考へると、小説を書いてゐるといふ私自身の姿は、実はいひひ換へると絵を描きたくて死んだ兄が抱いていた郷愁を日本とハワイにおきかへただけで仕事そのものはそつくりそのまま受け継いでゐるといふことになるかも知れぬ。(七四～七五頁)

この時期を題材にした短編が、先に少しだけ触れた直人の最初期作「帰つて来た私達」である。直人が参加した同人誌『重装兵卒』に掲載された他、ハワイでは『日布時事』で連載された。やはり、自伝的な内容で、直人を焦点人物として、寒さや、吐く息が白いという来日時の驚き、地元の子供たちとの交流、そして、母コマの姿が描かれる。横浜から熊本に付いた一家には、他の家族と違い、迎えがない。馬車に乗り、だんだん村に近づいてゆき、古くなつた家に辿り着いて、やっと親類と再会する。そこで、コマは大泣きする——決して希望に満ちた帰国／来日ではなかつたことが、うかがい知れる。

◆一九一八〜一九一九年 十四〜十五歳 補習科

直人は熊本鹿本中学校に進学することとなるが、二度、入学試験に失敗したようである。この頃の足取りは『早稲田文学』掲載の短編「礫」が参考になる。²⁴本作の焦点人物は「浪夫」であるが、来歴は直人と全く同じで、やはり自伝的な内容である。直人は一九一七年十月末に来日後、直近の四月入学を目指し、中学校を受験する。しかし、不合格となり、一九一八年秋頃より補習科（高等二年と合同）に通い始めた。熊本では、直人や妹たちは、地元の子供たちとあまり馴染めなかったようである。

本作は「堤を登つて腰をおろすと、なんとなしに涙がこぼれて来て、指先で拭くと、またいつの間にか溢れてきて、しまひにはどうする事も出来なかつた」と始まる。²⁵そして、浪夫は他の子供たちとの小競り合いを思い出す。「(…)彼等の声が束になつて耳を突き抜けるように響いてゐた。／『ハワイ帰り！』／『莫迦しゆう！』／『落第坊主！』／『補習学校！』／『帰りどぎやんめに会ふか覚えとれ！』」。²⁶また、日本に来て一年、直人が補習科に通い始めた頃の一家の暮らしぶりは、次のように描写されている。直人の当時の日本語運用能力についても言及が見え、長めに引用する。

そして結局、いろいろな意味に於て孤独に陥つた彼等はハワイに残して来た父の帰りを唯一の頼りにその日その日を過ごして行つた。母は十六年間の家の荒廃をとり戻すべく、姉は町のミシン教室所へ、そして波夫は二人の妹とともに、一度失敗した中学校への志望をますます固くして続いて補習科へ通ひ始めたのであつた。

波夫は村の学校へ高等二年として通ひだした当時のことを何か遠いことのやうに思ひおこしてゐた。着慣れた洋服をかなぐり捨てて、堅縞の袴を長目にはいて赤い筋の入つた学帽をきちんとかむつて、珍しさうに登校してゐた頃。一年中暖かい国に育つて、その国の正式な教育のほかに、僅かに受ける日本語の力では、しかし、どう

することも出来なかつた。まして、中学校へ入学するためには夜も昼もただ机に向かつてゐなければならなかつた。あるとき、紅葉といふ題の作文がでた。すると、浪夫はこの綴方といふ初めての課目をどう扱つていいか分からず、中庭にある紅葉した木を眺めながら稚拙な文字で書き始めたのであつた。『紅葉、紅葉が盛りだ。ほんとうに、木の葉は青いと思つてゐたのに赤いままでおちもしないで一杯木についてるさまはキレイで淋しい花が咲いたやうです。こんなことは始めてです。私の手は寒さで紫色に変わつてふるへてゐますが、木の葉も霜やけしてゐるのかも知れません。でも、あんなさみしい木も春が来ると、一度にぱつと明るい花が咲き出て来ると思ふと嬉しくなります。早く桜が見たいなあ。日本の桜は小さいときからどんなに——』次の綴方の時間に、受持の先生は浪夫の綴方を読みあげて、みんなを笑はせた。その綴方は見事な乙だつた。そのほか、とんちんかんなことばかりで、浪夫のすることはただ訳もなく先生を失笑させ、生徒に蔑まれた。そのたびに浪夫は愉しかつたハワイへの生活を思つた。そこには、こと違つて浪夫の自由な、何の屈託のない毎日が羽根をのばして待つてゐた。すべてが浪夫の思ふ通りになり、一日の太陽は希望そのものであつた。それは自分が幸福だといふことを知らぬほど幸福だつたのだ。浪夫は何か辛い思ひをするときは、いつも自分を温く育んでくれたそれらのものを思ひだし、手紙を誰れといふことなしに出してゐた。また、弱くならうとするときは、再びハワイへ帰らうかと思ふこともあるが、しかし別れぎわの先生や皆の顔や言葉をおもひだすと、逆に、どうしても、石にかぢりついででもこの難関は切り抜けて見せなければと思ひ直すのであつた。それは浪夫だけでなく、彼の母も姉も妹達もさうであつたに相違ないのだ。(一四一—一四二頁)

文化の違いや、日本語運用能力による直人の苦勞が見て取れる。この他、借金の返済、途切れがちになる父からの

送金や便り、或いは、下の妹の養子縁組の挿話なども描かれる。雰囲気は総じて暗く、寒く、根底に人間や自然に対する信頼を感じさせる『ハワイ物語』収録作群とは大きく違っている。なお、本作の末尾には「作者付記——この作品は『補習学校日記』といふ標題で書かうと思つてゐる長いものの一部である」と付されているが、管見の限りは見当たらない。

その後、猛勉強も及ばず、直人は中学受験にもう一度、失敗する。『新科学的文藝』三巻五号掲載「榎の悲劇」に、この時期のことが見える。²⁷ 日本での新たな生活に疲れ切つていたのは、直人だけではなかつた。中島一家にとつて、引き続き、父の帰国が唯一の希望だつたようである。

(…) 兄の不慮の死から、その遺骨を携へて急遽ハワイを發たなければならなかつたとき、父は一年ほどしたら仕事の整理がつくだらうから、と云ふ約束で別れたのだが、その父は一手経つても帰つて来なかつた。それどころか、二年目に入つた九月頃から、それまで時々仕送つてゐた金と、それから手紙とが来なくなつた。そして、私達にとつて、再び厳しい冬が訪れたのだ。一月の或日の事であつた。突然、父から手紙が着いた。月の末に帰る、といふものであつた。それを見て、私達六人の者は、久しぶりにはしやいだ気持で夕食をとる事が出来た。ところが、どうしたものか、それから予定の期日が来て、一ヶ月経つても二ヶ月経つても、父は一向帰つて来る気配はなかつた。母にやや憔悴の色が見えだして来た。そして三月の中学校の入学試験が来た。しかし、その結果は不合格に了つた。中学に入学する事によつて一つの積極的な避難所を得る事であつた私にはそれは何より大きな落胆であつた。即ち、父親の不可解な消息不明と私自身の不首尾といふ、二重の失望は私を深淵へつき落とす事であつたに相違ない。それから来るさまざま取沙汰。私は、漫然と自殺といふ事を考へた。そして、日が暮れ

ると、いつとはなしに村はずれの池の端の榎の近くへふらふらと出て行くのだ。それは、あたかも私の兄が死を求めてふらふらと闇夜の線路へ吸ひよせられて行つたやうに——。(六〜七頁)

この後、直人は立派な榎の上で、一人の男に出会う。彼は他所からやってきた電工で、勤め先の所長の妻に叶わぬ恋心を抱いている。よそ者同士、直人と男は心を通わせ、何夜か、榎の上で会い、交流を深める。しかし、直人はやはり自殺を決意する。夜半、母の帯で首を吊ろうとした刹那、父がついに帰国する。同じ時、男は榎から転落し、命を落とす——。本作は、後半につれ、物語的な構成がすっかりしてゆき、創作性を帯びてゆく印象を持つ。しかし、先の「礫」と共に目を通すと、直人のハワイへの望郷の念の裏側には、来日して間もなく経験した痛みがあったものとして問題ないように思う。日本を舞台にした自伝的作品の多くは、言わば『ハワイ物語』の裏面であり、ハワイ生まれの二世作家が見た『日本物語』と言えそうである。

満州事変勃発後の一九三二年以降、日系二世たちの日本留学が盛んになる。その背景には、愛国心の高まりや、円安といった要因があったが、日本の既存の公教育では、受入に際して様々な問題が発生し、留学生向けの特別な教育プログラムなどが整備されることとなる⁽²⁸⁾。直人の熊本における経験は、こうした流れの前史でもあった。直人はつまり解決の待たれる社会的問題の渦中にいたのである。

◆一九二〇〜一九二四年 十六〜二十歳 中学校

翌年、直人はついに鹿本中学校に入学する。直人の中学校時代についての資料は多くない。ここで先に引いた「布哇と書物の回想」に戻って来よう。前の引用の際に述べた通り、兄茂の死後、その蔵書の半分は焼却され、半分は遺

骨と共に日本に持ち帰られた。直人は日本語運用能力が向上し、兄の蔵書構成を理解するに至る。再び少し長くなるが、直人と茂という、太平洋を挟んだ、一方が一方の鏡像のような二人が、時空を超えて出会う様には胸に迫るものがあり、引いておきたい。

最後に日本へ帰った時の事を少し書き足してみる。私は日本へ帰って田舎の近くの中学校へ入るために今迄の折角の英語の復習をも全然一時放棄せねばならぬ等その他多くの犠牲を忍従しなければならなかった。何とかして後れた日本語を正統に獲得したいといふハワイ生れの執拗な覚悟であった。そして一年半の固い勉強ののち、私は漸く目的の中学へ入る事が出来た。そして真黒い漢文教科書をも少しづつ読めるやうになると、私は兄の勉強の一つであつた語学の習得の困難を辛うじて始めて推察する事が出来た。即ち、書物を通じて、私と兄とは何等かの意味で漸く結ぶ事が出来たのだつた。そして今迄はどんな本が兄によつて具体的に貯蔵されてゐたかを知らなかつた私は床の間に兄の描いた絵の入つた本箱と一緒に無造作に積まれた書物の山を一つ一つ下ろして見た。すると、そこには国語学の基本的研究から、文学、医学、天文学、絵画、靈術、政治、兵学、数学、植民史等々の思ひ掛けない種類の書類が見出された。兄はハワイへ渡つて以来三年間、実に驚くべき読書の範囲を広げてゐたらしい。そして、その中には製糖会社の仕事までも止して、専心する一つの意志を示したかのやうに血判を赤々と押した書又は封書があり、実用日記には恐ろしく達筆で赤や青の字がぬたくり廻つてゐた。そして、その中には、書籍の中の引例やその日の新聞紙の切抜きで満たされてゐた。それは大正六年の九月六日ですつてゐる。その翌日の七日にはその片隅にわづかに天気の所に晴天としてあつた。私は凡て息詰まる思ひに、これらを見詰めた。やつと、それを元通りに片付けると、私はたゞ私に差し当り必要な博文館発行『中等教科難問解説』(一)

から(十二)までの一揃ひを別にして左右に備へる事にした。それから数日経て、教科書の抜粋からヒントを得て夏目漱石の猫を発見する事が出来、蘆花をも数冊読む事が出来た。そして次に、再び『金色夜叉』を見出すに至つて私は旧知に異郷で会ふよるこびを味わつた。そして今は父も居ない所で今度は最も注意深く始めから読み始めた。私はそこで、荒木さんによつて果たされなかつた六つかしい地の文をも辛うじて読む事が出来たのであつた。つまり、私にとつて小説『金色夜叉』一卷を読み通すには足掛け、六、七年掛つたと云へるのだ。読書も又難い哉だ。ここに於て、兄によつて多大の方針を与へられた私は読書人としての覚悟を一層強固にしなければなるまいと思つたのであつた。(四〜五頁)

言語を獲得するとは、或いは、獲得できないとは、人間にとつて、何を意味するのか。直人や茂の一生を見てると、そんな問いが浮かんでくる。移民の国であるアメリカには、母語を別に持ち、英語で執筆する作家が多くいる。近年、この事象はアメリカ文学に限つたものではないだろう。世界のいたるところで、直人や茂の一生が、変奏されているのである。しかし、移民文学の文脈における直人の研究については、次回の課題とせざるを得ない。直人は鹿本中学校を卒業した後、早稲田大学の予科に入学し、上京する。その頃の彼の足跡を整理しておきたい。

◆一九二五〜一九二八年 二十一〜二十四歳 予科〜大学二年

直人が早稲田大学の予科にあたる早稲田大学高等学院に入ったのは、一九二五年である。中学を卒業しているので、二年制の第二高等学院ということになる。直人には、日本に留学する日系二世たちについて書いた「第二世留學生の悩み」という随筆がある²⁰⁾。直人は本エッセーの中で、上京した頃の心境を次のように述べている。

(…) 中学校を出て早稲田を眼差して東京へ上つて来た当時のことにも私の回想は続いた。私にはいまでも自分の故里を想ふ気持が執拗にある退引きならぬ形で奥深く巢食つてゐるが、当時の私にはまだまだ生のまま私を東京に追ひやつた。私は早稲田に入ったが、そして早稲田の学校生活も私にとつて必ずしも幸福ではなかつたが、しかし、ハワイから日本へ帰つて来て、憂鬱な学校生活を田舎で送つて来た私には、何かいままで日本では味はつたことのない自由な解放された楽しさに違ひなかつた。(二〇頁)

直人は引き続き、ハワイへの望郷の念と、その裏面にある痛みを抱えながら、東京で少しの解放感を覚えたようである。直人が予科に入学した直後の様子は『布哇報知』掲載の「作家の覚悟」にも描かれている。⁽³⁰⁾露文科の最初の主任であり、当時の文学部長であり、本学図書館の露語蔵書構築の礎を築いた片上伸も登場する。

もう彼れ是れ十二三年前になるが、私が息苦しい九州の片田舎の学校生活をはなれて東京の早大高等学院(予科)の文科に入ると、そこには全国から集まつた文学志望の学生が大部分でめい／＼お国訛の交じつた東京言葉で文学を論じ哲学を語つてゐた。私は別に特に文学を志して上がつてゐたわけではなかつたが、中学校とは異なつた特殊な、桁の高い雰囲気になかば好奇心と多少のおそれを抱いて当時芸術家頭と云はれてゐた長髪のものらの学生の闘はしてゐる文学語を傍で盗みぎきしてゐたが、それから間もなく或る日、知り合ひになつた学生がかういふ話をしてくれた。

それによると文学部長の片上伸教授が文科の新入生達に一場の訓示を述べに来たが、学生の集まつてゐる教室

に入るや否や「君達は文科づらをしてゐない。転科したまへ！」と一喝したといふのである。私は何かのことで恰度その日は欠席してゐたので、それをきいたときは、噂通り文学部長の元氣らしいのに感心もし随分無茶だなあ、とも思つた。大分それが学生間にセンセーションを起こして、そのときの片上氏の動作をそのまゝ、真似てみせるものもあつた。

(…)

私が早稲田に入つたのは別にはつきりと小説家にならうとゐふ気持ちからではなく、ハワイ生まれとして散々環境にいたみつけられた所から大分疲れもしそこから逃れたい気持ちもあつたので学問の自由を尊ぶ早稲田にでも入れば救はれるかも知れないといふ漠然とした気持ちで入つたのだが、そして東京に於ける学生生活はある点まで私を解放してくれ、それに周囲の影響で私自身も小説を読み映画、芝居を気兼ねなく見て歩くやうになつて私の生活が明るくなつたことは事実だ。しかし、文学に親しむことによつて人生の見方を少しづつ、学び知ると共に私はいまゝでハワイで生れたことに一種の引け目を感じてゐたが逆に漸次一つの喜びに変わり、やがてその喜びが異郷に故郷を持つ者の云ひ知れぬ遣瀨なさを覚えて来た。

私の望郷といふものが文学といふ軌道の上に乗つて来て一つの影を作り始めたこと云つてもよい。(八面)

この記事によれば、直人は上京した当時、小説家を志していたわけではなかつたようである。評論『海路歷程』と『ユリシズ』評³¹にも早稲田時代の様子が少し描かれている。大学一年生の時と思われる。

あの頃、学校には「主潮」「朝」など、云ふ有力な文芸雑誌もあつて私達下級の者に異常に新鮮な刺激を与え

つつあつた。文科の各クラスにも研究会が出来て委員達は緊張した顔付に落ち着かぬ態度で、寄付金でも募るやうに会員を集めてゐた。その時、私は考へた。こりや、一つ私も文学志望者にならうと。そして相棒のSに相談した。すると、Sはキレイな顔面無表情に凝結させたまま、小一時間も静かな大隈会館の庭をあちこち歩き廻り乍ら、「仕方がない」と弱弱しく云つた。此の意味は、みんなが文学をやるのなら、仕方がない、僕らもその仲間にならう、といふのである。二人は、映画を専門に研究しやうと志してゐたのである。(四九頁)

この後、二人は研究会の一つに入らうとするが、直人はその研究会で中河与一がぞんざいに扱われているのを知り、冷めてしまう。「私は考へた。いつそ、国の中学校を出てくる時、教師から英語学者になるやうに薦められたが、かういふ風なら、早稲田だつて大した事はない。いつその事、一つ思い切つて、東京で、堅気な学校へ転校しやうかしら」と³²。それでも、直人は中河の『恐ろしき私』を読み、研究会には入らずに、Sと二人で文学の道へ進んだようである。そして、大学二年生の時に、直人はついに小説を発表する。ハワイで生活を共にした家畜たちを通し、性の芽生えを、ユーモアを交えつつ描いた短編「すゐぎゆう」で、掲載誌は『一九二八年』だった。『ハワイ物語』にも収録されている。発表当時の様子は随筆「物を書くといふ事」³³に見える。

私が私の作品を発表したのは一九二八年に『一九二八年』といふ私達の同人雑誌に「すゐぎゆう」といふのを発表したのが最初である。私が恰度、大学の二年のときで、早大仏文科の連中が中心で私たち英文と国文の者も五、六名参加した二十人あまりのグループであつた。いよく作品を発表するといふので私達は極度に緊張した。といふのは早稲田に入つて三年の間私達は他の連中のやうに別に雑誌も出さず作品も発表せず数名の者が週に一回

誰かの家なり下宿に集まつて自分の読んだもの、感想を述べあつたり回覧したメンバーの作品の批評をしたりしてゐたやうな始末だつたから。それが、いよ／＼大きなグループになるといふので私達はとにかく緊張した。新しい文学は必ずわれ／＼の中から生れるといふ気持ちであつた。私は少し書きたためておいた中から「すみぎゆう」いふのを選んでそれを推敲することにした。そしてとう／＼十回前後書き直してしまつた。いよ／＼自分は作家になるんだといふ喜びと物を書くことの苦しみが大変だつた。処女作といふものは誰しも苦心するものであるが、当時はこんなに書き直さなければ一つの作品が出来上らないといふのは自分の作家としての資質がないのぢやないかと思つて内心不安でもあつた。そしてこれはやはり自分がハワイ生れである所からまだ充分に日本語をマスターしてゐないためぢやないだらうかなどと思つてもみた。(八頁)

この時、すでに書き溜めたものがいくかあつたとあるので、発表こそしなかつたが、創作はすでに行つていたようである。また、来日して十年が経つていたはずであるが、まだ自身の日本語運用能力に疑いを持つている点にも注意を払いたい。これは母語の揺らぎや、第二言語による執筆を経験した者の、ある種のトラウマのようなものではないか。この引用部の直後、ゴ－ゴリが推敲／書き直しを繰り返した話を知り、安堵する挿話が入る。

◆一九二八年 二十四歳 直人のデビュー誌について

日比も、黒田も、また本論も「すみぎゆう」が掲載されたとされる『一九二八年』には、残念ながら、当たれていない。『文芸都市』二巻一号の鼎談「文芸都市批判」³⁴によれば『一九二八年』には、一部ではあるが「ハワイの二年とキヤンプ」も掲載されたようである。また、『創作時代』二巻十号掲載の逸見広「九月創作月評」³⁵には、『一九二八

年』の立項に、直人の作品として「はな子」と「胡椒」の名が挙げられている⁽³⁶⁾。「はな子」については、ハワイを舞台とするようであるが、『ハワイ物語』未収録であり、未見である。以上のように、『一九二八年』には直人の初期作が多く含まれていたと推察される。

ここで、一つ整理しておきたいのは、当時『一九二八年』と『一九二八』という雑誌が別々に存在していたという点である。直人のデビュー誌は前者で、創刊の翌年から『重装兵卒』に改題する。一方、『一九二八』は『作品』へと繋がる同人誌で、『作品』編集長、また、ジョイス『若き日の芸術家の肖像』の共訳者となる小野松二が中心だった。『一九二八』は、刊行年に合わせ『一九二九』『一九三〇』と改題する。先の逸見広の創作月評には『一九二八年』とは別に『一九二八』の立項がある⁽³⁷⁾。『一九二八』とその継続誌については、近代文学館に一部所蔵がある。全点確認したが、やはり直人の名前はない⁽³⁸⁾。また『一九二八』四号⁽³⁹⁾の編集後記においては、小野が『一九二八年』とのタイトル重複を嘆いている。

他誌「千九百二十八年」は、本誌「一九二八」を組合へ加入してゐない如く怒鳴つてゐるが、早い話が、組合の手でなくして、つまり我々僅々数名の手で、どうして「一九二八」が、ご覧の通り完全に各書店に配本され得るか。又、彼等は題名の暗号を認めませんがために、彼等の計画が一月からだといつてゐるが、これは彼等の頭のあるさ加減の表現にのみ役だつものであつて、何故なら、まるで麻雀の牌を向ふ向けで並べたやうなもので、実に、我々の計画は去年のはじめからだ。だからたとへ暗号だとしても、問題は「一九二八」の方が先に創刊号を市場へ送つた一事で解決されるべきではないか。遠慮し給へ。(小野) (七〇頁)

小野がわざわざ「千九百二十八年」と書くのは、美的な当てつけを別として、「一九二八年」と「一九二八」の読みを区別するためだろう。『1928』初号は一九二八年三月一日付の刊行である。また、『一九二八年』の継続後誌『重装兵卒』の一九二九年四月号は『一九二八年』創刊から数えて一周年記念号とされており、編集後記には「去年の四月「一九二八年」を創刊」とある。⁴⁰直人や小野の記憶／記述に間違いがなければ、直人たちは一九二八年一月より『一九二八年』の準備を始め、『1928』初号が三月に出た後、直人が大学二年生になった四月、初号を刊行したようである。『重装兵卒』は『一九二八年』から通号で号数を採っており『重装兵卒』への改題号が八号なので、『一九二八年』は七号を刊行したことになる。書誌を整理すると、「狂った轉轍機」や「帰つて来た私達」は『日布時事』での連載に先んじて『重装兵卒』に掲載されたようである。『重装兵卒』も近代文学館以外の所蔵館が見つからず、限定的な調査に留まったが、⁴¹『一九二八年』と合わせ、直人の初期の創作活動を整理する上で極めて重要であることは、間違いないだろう。

◆一九二九年 二十五歳 大学中退

直人は一九二九年春、大学を中退した。『一九二八年』で諸作品を発表すると、井伏鱒二が直人に関心を持った。その井伏に誘われ、直人が『文芸都市』二巻七号に「布哇生れの感情」を発表したのが、一九二九年七月である。⁴²そして、同年十月からハワイの邦字新聞『日布時事』にて「帰つて来た私達」の連載が開始される。この連載については、井伏が随筆「ハワイ行き」他で言及している。⁴³「新聞社では機転をきかし、その小説を掲載する二三日前、社会面記事に中島君のことを「ハワイ生れで内地文壇に活躍してゐる未来ある年少作家」といふ見出しをつけて書き立てた」。⁴⁴この記事は『日布時事』掲載の「布哇が生んだ小説家／故国文壇に出ず／作品を通じて生まれ故郷の／布哇を

紹介したいと云ふ⁴⁵／＼中島直人君の此意気込⁴⁵のことと思われる。直人の日本での活躍を紹介する他、本人による簡単な自己紹介を含んでおり「(…)早稲田大学文学部に入学致しましたが此春五カ年の学生生活を捨て、今は文筆の業にいそしんでゐるもので御座います⁴⁶」とある。ここまで引いてきた直人の記載に忠実になれば、「五カ年」は、上京後、五回目の春を迎えた、ということになるかと思ふ⁴⁷。

退学に際し、直人に何があつたのだろうか。この辺りの事情は『文学クオオタリイ』掲載の創作「遊ぶ仔犬」に伺い知れる⁴⁸。焦点人物は直人の名で登場し、直人の母も「おこまさん」と呼ばれるが、物語的な構成も感じさせる為、自伝的とは言え、一定の留保が必要とは思ふ。この短編は「卒業祝ひをやると云ふ前日であつた」と始まる。最終試験が終わり、直人が二年振りに熊本に帰る。母は三十年前にすでに失明していた左眼を最近摘出し、病床に伏している。概ね恢復しており、明日には退院する見込みであり、「卒業祝ひ」を楽しみにしている。物語の終盤、直人は東京の友人・辻から手紙を受け取る。直人は病室に隣接した小さな部屋に退き、すぐに目を通す。直人の帰郷前、辻は思想的な傾向を帯びつつあつた。

中島君！ 僕は、またなんと云ふ手紙を君に書き送らねばならぬのだらう。考えへてみると、僕は君にとつて一個の悪友ではなかつたらうか。今となつては少なくとも僕にはさう思へてならない。と云ふのは、外でもない。僕は、学校を到頭落第したんだ。否、それだけなら未だいい。しかし、君までかういふ事にならうとは！ 僕は夢のやうな気がして仕方がない。こんども、僕の事をあれほどいろいろ心配してくれたのは君ではなかつたか。僕がほんの些細なことから事務員と口論を始めたのがもとで、君までも巻きぞへを食はして了つて、その時でさへ済まないといふ気持で一杯であつたのに――。僕は事務員との口論もあるが、事実学校の成績は思はしくな

かつたのだから止むを得ないとしても、単に仲裁としてその頑固な事務員や職員と折衝してくれた君までもかういふ結果におとし入れるとは余りに意外だ。かういへば、冷静な君は、事務員との一件を否定するかも知れないが、あの場合、彼等にとつては何等かの口実を与へたことになるのだ。これは強ち、単に僕自身の、物事に対する誇張癖からばかりではなささうだ。とにかく、僕は此の手紙を認めながらも一つの大きな憤懣を覚えるのだ。それにしても、中島君よ！ 君と僕とはこの数年間、なんとまた同じ運命の経路を辿つてゐることだらう。君が病気をすれば僕もするし、僕が愛に敗るれば君も亦敗る。をかしいではないか。そして、到頭こんどの場合だ。しかし、この手紙を書かねばならぬ僕自身の身にもなつてくれ！（二六五―二六六頁）

直人が中退した実際の理由は、不明である。『早稲田大学百年史』にも「英文中退」とのみ見える⁽⁴⁹⁾。この短編に登場する「辻」や、先の引用に登場した「S」他、直人の学生時代の交遊関係の詳細については、本論では積み残さざるを得ない。

◆一九二九―一九三六年 二十五―三十二歳（一） 川端による直人評

早稲田大学を中退したその年から、直人は本格的に作品を発表し始める。書誌を整理していると、初期は『日布時事』での連載が目に残る。また、日本においては『新科学的文藝』への掲載作が比較的多い。また、同時代の人物情報の面では、本人の筆によるものは、引くべき対象がほとんどなくなってしまう。直人が過去を見つめながら書き続けたという事実が、よく分かる。直人の作品そのものはここまで多く引いてきたので、他者による直人評に目を向けてみたいと思う。井伏が『一九二八年』掲載の直人の初期作を見て『文芸都市』に書かせたという挿話は先に少し

言及したが、その他、公に直人を評価した人物の代表的な一人に、川端康成がいる。川端は『ハワイ物語』へ序文を寄せる以前から、直人のことを極めて好意的に書いてきた。一九三一年九月刊行『新科学的文藝』二巻九号掲載の随筆「中島氏その他」には、次のように見える。⁵⁰

「新科学的」の中島直人氏は、優れた作家であると思ふ。

材題マ的にも立派な作品を書いてゐるのは、同人雑誌では、この中島氏と那須辰造氏である。つまり、手薄な弱さがない。

中島氏の不遇は、井伏鱒二氏が文壇に名をなす前に既に十分老熟してゐたのと似てゐる。中島氏の「ミス・ホカノの鞭」なんかを読むと、この作家はもう一つの頂点を示してゐるやうに見えて、むしろ痛ましい思ひをさせられる。妙な云ひ方だが、これ以上この作家を埋もれさせておくのは、文壇の不徳であり、またこの作家にも危険であるといふ気がする。

中島氏の創作集が今出版されたら、氏の価値は忽ち認められるだらう。一二作を文壇的な雑誌に発表するよりも、創作集を世に問ふべきであると思はれるほど、この作家は今日までに立派な仕事をして来てゐるやうだ。いろいろ有名な同人雑誌の未成の作家たちとは、大分ちがつてゐる。(五八頁)

川端の書評が同時代人たちによつて受け止められていたかという問題はあるが、最低でも、川端から見た直人は留保無しの才能だった。直人にしても、諸短編を『ハワイ物語』として纏めるといふアイディアは、元を辿れば、川端の書評から得たのではないか。川端の直人に対する評価は、二年半後、一九三四年二月一日付「読売新聞」掲載

の「文芸時評／ハワイ小説／中島君の出現」でも変わっていない。

(…) 私が以前愛着の言葉を贈った坪田讓治氏や中島直人氏など、その長い不遇の間に才能がしぼんでしまったと仮定しても、過去の作品だけで立派な作家である。(…)

さて、中島直人氏は「文學界」に「ワイアワ駅」を書いた。実いへば推薦者の私は、その出来栄えに不安だった。中島氏は約十年間ハワイの小説ばかり書きつゞけてゐる。しかも、そのハワイには十四五までしかをらなかつたので、少年時代の思ひ出だけで書いたわけだ。いつも子供たちが出て来る。これはよくよく異常なことだ。このやうな作風、また中島氏のやうな素質が、数年の不遇でどうなつてゐるか、私にはいろいろ想像された。ところが果たして私の杞憂に過ぎなくて「ワイアワ駅」で私は作家の素質を心から楽しめた。私は今日まで、自分の雑誌の「文學界」にも、中島氏と那須辰造氏との二作家しか推薦してをらぬ。だが、この二作家より作家らしい新作家が、近ごろどここの雑誌に紹介されたか、私は敢へて問いたい。(…)

処女作の頃の明るく外れた新鮮さはない。味はひを多くのこす文章で、少し散漫なところもある。子供を書きながら、大人の侘しさである。しかし、さういふ欠点らしさも反つて効果を添へ、少年の思ひ出を老練の筆致で描くといふことが、ちやうどハワイ音楽を聞く時と同じ明るくやるせない哀感となつてゐる。恐らく歌ではあるかもしれないが、やはりいはゆる第二世の小説にはちがひなく、特に日本育ちの兄がハワイの空気になじまず、発狂して自殺するあたりは、この作品の陰を深めてゐる。けれども、主人公の少年はこの作品で、遂にハワイを離れ、母国へ旅立つ。今後の中島氏の作品は、どこへ向かつて船出するであらうか。(四面)

落ち度と思える点さえ、文学的効果を生んでいるという評価は、賞賛の内でも最大級のものではないか。『ハワイ物語』が刊行されるのは、さらにこの三年近く後、一九三六年十二月である。川端の序文は「『ハワイ物語』に序し、渡航を送る」と題され、そこには直人作品への継続的な愛着が綴られている。後に触れるが、直人はこの短編集のハワイでの売り上げを見越して、念願の帰布を叶えることとなる。

初め中島君の作品は、海風薫り緑濃き常夏の楽園に嬉戯する少年に似て、自由鮮麗、日本離れた明るさであったが、やがてあのハワイ音楽のやうに、甘美な哀愁を奏で、また移民の果無い現実の悲嘆が深まり、遂には流人の虚無頹廢が歌はれ、熟達のみごとさは底冷い凄気さへ漂はずに到つた。しかも終始一貫するものは、ハワイの郷土色であり、ハワイへの思慕であり、少年の日の追懐である。少年の心の印象は、なにより真実純潔であつて、新鮮な詩情の源をなし、また痛烈に現実を貫くものであるといふ、文学の尊い一例をここに見る。私が終始一貫君の作品を愛読賛称する一人であつたことも、この好機に誇りを以て人に告げたい。(シンプルなし)

◆一九二九〜一九三六年 二十五〜三十二歳 (二) 作家としての生活、帰布の試み

大学を中退し、作家に専念していた頃の直人のことは、仲間たちの文章にも見える。『木靴』同人であり、『ハワイ物語』版元の砂子屋書房創業にも参加する浅見淵の『現代作家研究』には「中島直人と布哇」と題された人物評が収録されており、次のようにある。

学校を出てから随分貧乏もしたらしいが、焼芋ばかり二ヶ月とか三月とか食つたこともあるそうだが、そして

現在もあい変わらず貧乏しているが、中島君に会っていると、妙に貧乏くさくないのだ。ジメジメした、陰気なところが無いのだ。どっか陽気な布哇人の面影があるのだ。その癖、一方、移民の子らしい素樸さと、朴訥さがあつて、僕などにも親しめるのである。(九四頁)

貧乏な好人物としての直人は、川崎長太郎「『ハワイ物語』のこと」⁽⁵³⁾にも見える。

(…) 作家に貧乏は通り相場になつてゐるとは云ふものの同君の貧窮はなまやさしいものではなかつたやうだ。そんなに貧困の底に居ながら、同君の顔色は何時も麦の穂のやうであつた。表情が子供のやうに豊かだつた。一昨年の暮近く「木靴」の同人会があつた折、私は居合はせた面々を見渡した所、穢ない恰好をしてゐる同君の顔が一番福々しいのに気がつき驚いた事があつた。みみつちい実生活より遙か高い所に立つて書かれた「ハワイ物語」は天上の書のやうな気もするのである。(七二頁)

この期間、帰布の試みは、幾度となくあつた。井伏の一連の回想によれば、一九二九年頃、直人と井伏は一緒にハワイに文壇を作る計画を立てていた。「中島君と協力で、人々の知らない間にハワイに新規の文壇をつくらうと計画してゐたのである(…)／＼若し私の希望が実現できるなら、私は中島君その他の人びとと一しよに、ハワイにおいて文学同人雑誌を発行するつもりであつた」⁽⁵⁴⁾。これは「日布時事」で「帰つて来た私達」の連載が始まる頃で、直人は希望に満ちていたが、同連載は全く話題にならなかつたようである。そして、ハワイへの思いを募らせてゆく。「しかし彼はハワイに生れハワイで育つた人である。ハワイを極りなく愛してゐる。この頃では彼は詠嘆的な口調でい

ふ。／『ハワイ！ 僕は、もう一ぺんハワイに帰りたい！』⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾ 次は、一九三三年夏のものである。先に引いた浅見淵「中島直人と布哇」には以下のようにある。

(…) 去年（著者注：一九三三年）の夏の、布哇行の計画となつて現われたのである。

中島君の今迄に書いた、布哇を主材にした作品を蒐めると、一冊の単行本に纏まるぐらいある。それで、「布哇物語」と銘うって自費出版し、それを持って布哇へ渡り、布哇出身の最初の小説家という触込みで、講演会を開き乍ら各地を売って歩いたら、往復の船賃は勿論、ひよつとすると一年位の生活費を持って帰れそうだとこののである。（九四頁）

しかし、これもうまくいかない。往路の船賃代や印刷代を捻出すべく、予約を取ったり、ハワイの新聞社に援助を依頼したりするが、世界恐慌の煽りを受け、資金が集まらなかった。浅見は続ける。

中島君の下宿の壁には、明治四十年代に出来た布哇全島の地図に並んで、郵船の亜米利加航路の日割がピンで留めてあり、一日千秋の思いで、中島君は乗船する日を待っていたのであるが、到頭十二月になって行けぬことがハッキリし、僕はその当座、中島君の顔を見るに忍びなかった。（九五頁）

さらにその次は、一九三五年一月と思われる。「一九三四年十二月十六日」と付された井伏の随筆「直人ハワイ行き」⁽¹⁷⁾に「中島直人氏は一月下旬いよいよハワイに行くさうである」とある。⁽¹⁸⁾この随筆に依れば、直人は「二昨年の夏」

も「その前年」も「またその前年」も帰布の計画を立てたり、抱負を語ったりしていたようであり、実際のところは整理が難しい。「しかし今度こそ彼のその希望は実現する」とあるが、結局、本当の帰布は『ハワイ物語』が出版される翌一九三六年十二月を待たねばならない。

◆一九三五〜一九三六年 三十一〜三十二歳 『ハワイ物語』刊行の経緯

そして、『ハワイ物語』の本当の刊行がいつに動き始める。これに大きく関与したのは、小林倉三郎という人物であった。小林は作家や編集者ではなく、原稿用紙の専門業者「久楽堂」の経営者だった。谷崎の最初の妻千代や、直人と交流のあった古木鐵太郎の妻の兄にあたる人物で、作家との交流も広がった。太宰治研究の方面では、太宰が終戦前まで久楽堂の原稿用紙を使用していたことや、小林が『虚構の春』に登場する田所美徳のモデルになったことが知られている。『文学生活』一九三七年二月号は、『ハワイ物語』刊行と直人の帰布に合わせ、直人の特集を組んでいる。小林は随筆「『ハワイ物語』が出来るまで」を寄稿し、同書刊行の経緯を詳しく述べている⁶⁰。商売人らしく、人を観察する目に肥えており、語り口も親しみやすい。直人と小林は古木鐵太郎を介して出会った。小林の記憶では、一九三五年初夏、直人は彼に帰布の計画を話す。

中島氏は川端さんの中島推薦文及び新聞雑誌の各種切抜きを始めとして、ハワイに関する数年間に渉る来信並びに紹介状、さては、原稿紙の切つ端の幾枚もにこまごまと書きつけた心覚え等々、浩瀚なる資料を繰り広げて、ハワイ行のプランを真摯に克明に説明して、さうして最後に

「——本を作つて呉れる人がありさへすれば必ず、成功するのだがなあ」

と感慨を籠めて云つた。而も、既に詳細なる収支計算表までも作製して私に示すのである。私は彼のこの切なる志望の達成に尽力して見ようと心うごいた。(…)

私は中島氏に極力奔走して見ようと約束した。(七八頁)

小林はまず、K書店に声をかける(以降、イニシャルは本隨筆に登場するママである)。前年、その書店に、ある全集発行の企画を持ち込み、全十三巻が成功の内に刊行され、盛大なお祝いをしたタイミングだった。感触は良好で、直人のK氏への紹介も済む。小林は、K氏と直人が順調にやりとりしている様子から安心し、改めて本業に専念する。しかし、その後、具体的な話が進まない。直人はしびれを切らして、小林に当り、二人は喧嘩。話は立ち消えとなってしまう。計画が再開するのは、翌一九三六年夏である。小林が銀座にあるS出版社を本業の方で訪問した際、同社M氏から儲け話がないか聞かれる。小林が直人の計画を伝えると、M氏は直ちに同意。後日、小林は直人を連れ、M氏宅を訪問する。

M氏はそこで、同社の資金繰りが芳しくないことを正直に話し、渡航費他は直人持ちにした旨を提案、直人はしぶしぶ同意する。帰路、小林と直人は浅見淵を訪ね、渡航費募集の為の後援会の設立を依頼する。浅見は快諾し、同会は間もなく発足。しかし、S出版社の経営状況が世に知られることとなり、小林は各所から忠告を受ける。小林は本づくりについては素人で、編集計画を検討すると、そもそも渡航に間に合わない。製作費の支払い計画は、遅延が前提となっている。直人はそれでもS出版社を信じようとするが、小林はあきらめ、後に『ハワイ物語』の装幀を担当することとなる富澤有爲男に、神田のS書房への斡旋を依頼する。富澤は快諾するも、この線も結局、うまくいかない。それで、どうしたかと言うと、小林が作ったのである。

—— 一夜明けた翌朝私は、窮すれば通ずといふ言葉の甚だ適切なのを知った。自分が引き受けてやつて見ようと決心したのである。「ハワイ物語」の販売が好成績に行けば、相当な儲けがあると打算したのは勿論である。しかし、私は自分の微力を顧みて、下谷にコロタイプ印刷業を営む竹馬の友人N氏にこれを諮った。

N氏は恬澹にして信義に篤い男である。

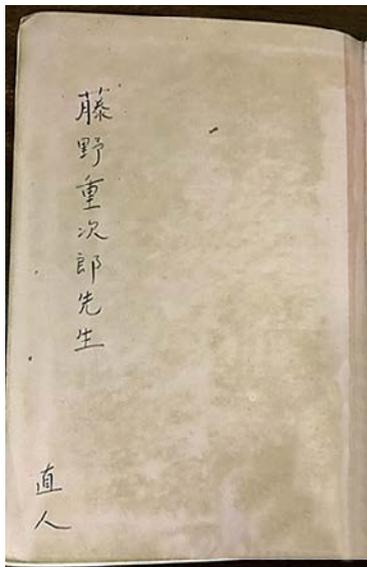
その恬澹振りについてはいろいろ話もあるが、彼は私の説明の詳細をさへ俟たずしてその協力を快諾した。同席した中島氏は漸く安堵したのである。(…)

要するに、中島氏のハワイ行の実現は、私の些少なる責任感と膨大なる商人的野心とのアベツクに依つてなされた私の純然たる一事業とでも云ふより他はないのである。私は目下「ハワイ物語販売株式会社」の総支配人として、今は社長中島直人氏の色よい報告を鶴首して待つばかりである。(昭和丁丑正月記)

附記—— 砂子屋書房主人山崎剛平氏に版元になつて貰へたのはうれしかつた。記して感謝の意を致す次第である。(八二―八三頁)

読んでいるだけで、小林倉三郎という人の魅力が伝わってくる。右往左往している直人との組み合わせも、本人たちの真剣さが相まって、可笑しみを覚える。こうして完成した『ハワイ物語』の奥付には著者直人や発行山崎に併せ「コロタイプ製版中川次郎」と見える。「恬澹にして信義に篤い」Nは彼の事である。小林の名はないが、刊行の経緯を知った上で眺めてみると、同ページ上で唯一、太字のゴチで印字された「定価一弗五十仙」という文字列の向こうに、その存在を感じる。富澤の装幀も美しい。直人の作品群は、小林の仕事がなければ、すなわち掲載雑誌／新聞のみでは、私たちの手元まで届かなくなったのではないかと思う。尾崎一雄の『あの日、この日』には、後日談として、小

林が「いや、あの件は忘れようとしてゐるんです」と語る場面があり、事業としては、残念ながら、失敗に終わったようである。⁶¹しかし、それでも小林は重要な仕事をしたと言えるだろう。



※本学所蔵の『ハワイ物語』署名本の写真。寄贈相手の藤野重次郎は邦語学者、東京市主事、日比谷図書館長。
一九四〇年七月、二世教育の視察などの為に渡米、各地を巡回しており、その際に直人が寄贈したものと推察される。

◆一九三六年 三十二歳 婦布

一九三六年十二月、直人はついに帰布する。十二月十七日横浜発の龍田丸に乗り、二十四日にホノルルに到着した。⁽⁶²⁾このことは現地の邦字新聞でも逐一、報道された。出航の一週間程前、十二月十一日付『日布時事』には「布哇出身小説家／中島直人氏の来布／二十四日の龍田丸便で」と予告記事が出る。⁽⁶³⁾次は、同月二十六日で写真付である。「龍田丸船客談／生れ故郷布哇を觀に來た／二世作家中嶋直人氏／六ヶ月滞在して各島廻る」。⁽⁶⁴⁾この記事によれば、直人は到着後、ただちに移民局に移され、入国できなかつたようである。真珠湾攻撃直後、日系コミュニティの指導者たちは一斉に検挙されるが、開戦前から始まつていた一連の準備と関係があるのかもしれない。⁽⁶⁵⁾帰布の目的の一つは取材、もう一つは、東京にて、山下草園、宮城聰両と共に発会した布哇ペン倶楽部の支部設置だった。また、直人は、当初、六ヶ月でアメリカ本土に渡るつもりだったようである。姉がアメリカ本土、妹が満州にいる旨も記されている。どちらの妹かは触れられておらず「磔」で言及された下の妹の養子縁組は、創作でなかつたのかもしれない。取り調べが終わり、上陸を許可されたのが、三十日である。同日付の『日布時事』に「中島直人氏／けふ上陸す／本社を訪問す」と記事が出ている。⁽⁶⁶⁾直人自身による到着後の第一報としては、年が変わつて一九三七年一月一日付『日布時事』に「十九年振りのハワイ」が掲載される。⁽⁶⁷⁾

龍田丸では私はハワイに近づく程幸福になり、三四カ月の間、ほとんど四、五時間づゝしか寝てゐない疲れた体ではあつたが、船員の人達にも笑はれるほど子供のやうに噪いでゐた。十九年ぶりに、いよいよ生れ故郷のハワイが見られるという私の気持ちは、恐らく乗客の内でも一番幸福な人間であるといふ気持ちが始終私の総身にみなぎつてゐた。

カワイ島の山々が見えて海の色が青く澄んで見えだすと、私はもうちつとしてゐられなくなり誰彼といふことなく人々に話しかけ、両眼の霞すんでくるのをどうする事も出来なかつた。

ここに描かれる直人の姿には、十九年前、熊本の田舎に下つてゆく少年時代の彼が重なつて見える。種々の痛みからの避難先であり、二十年近くもひとりでに膨らみ続けた想像の中の楽園に戻つてゆく感覚とは、一体、どんなものだったろう。直人はこの後、思い出の地を巡つてゆく。その巡礼の様子は「歳月は流れたり」に纏められ、一九三七年三月～四月にかけて『日布時事』で連載される。直人は、この連載の中でもやはり過去の方を向いている。もう書けなくなる——そんな雰囲気と言葉の端々に漂っている。三月二十三日付の連載初回には以下のようにある。

早いもので私がハワイへ来てすでに三カ月近くになる。この間、私はたゞ夢を彷徨つてゐるやうな気持ちで自身所在がはつきり分からぬ位であつた。そして、来る日も来る日もなんとなく過ごしてゐるのである。(…)

いま、私は永い間の旅から帰つて来たやうな気がする。ハワイといふ母親にいまこそびつたり寄り添つてゐるやうな気がしてゐる。十九年のながい間はなれてはゐるが、母親なれば私はその人の深い愛情を信じてゐる。(七画)

実際、この次、直人が執筆らしい執筆をするのは、二年後の一九三九年一月で、同じく『日布時事』で連載した「思い出の場末」である。日本にいた際に通つた食堂について回想した随筆／創作で、同じ方向性の題材、アプローチとしては、力尽きたという印象を持たざるを得ない。

◆一九三七年～一九四〇年 三十三～三十六歳 結婚、渡米、死去

人物情報としては、「歳月は流れたり」連載後の一九三七年五月十日『日布時事』に「作家中島直人氏の／涙ぐましい友情／重患の友細川開教使に／五百グラムの輸血」という記事が載っている。⁽⁸⁸⁾ここで腹部疾患の為に大手術を受けたと報じられている細川治學は、一九三七年一月に『日布時事』にて「中島直人を語る」と題した人物評を三回に分けて連載しており、直人と関わりが深かった人と思われる。⁽⁸⁹⁾仏僧であり、教師だったようで、治學の手術が決まると、直人が代わりにカワイロア日本語学校で教鞭を執った。また、術後に治學の様態が急変すると、直人は病院に駆けつけ、血液を供した。この出来事がきっかけか分からぬが、直人は教師として生計を立てることとなる。これ以降の直人の足跡については、戦後もしばらく経ってから、一九六二年六月五日に『日布時事』後継紙『布哇タイムス』に掲載された「布哇文学／中島直人伝」が、もつとも包括的である。⁽⁹⁰⁾治學の手術の翌年、一九三八年三月に直人は結婚するが、同記事は、直人の妻清子さんの実姉への聞き書きである。

結局、中島氏が生活のため布哇で拾った仕事は、布哇中学校での先生という仕事であつた。

その頃、新垣清子さんもローヤル公立学校内にあつた、チエイーン・スクールと呼ばれる日本語学校の先生であつた。

中島氏も新垣さん（ペンネーム緑君子）も共に潮音詩社同人、二人が結ばれて、結婚にまで漕ぎつけたのは一九三八年（昭和十三年）の三月であつた。

次いでその年の九月、中島新夫人は米大陸で洋裁のデザインを研究すべく、加州のギルロイに在中する中島氏の実姉堀田夫人（この人もハワイ物語のモデルであること勿論）を頼つて渡米した。

そのギルロイの日本人社会では日本語学校の校長を切実に求めていた時であつて、布哇に残つていた中島氏に白羽の矢が立つた。

一九三九年（昭和十四年）中島氏の渡米となり、越えて一九四〇年八月には中島新夫婦の間に男子が生れ、博人と命名されたが、それから三カ月後の十二月十三日、中島氏は思いがけない自動車事故で急逝したのである。

翌一九四一年、恰度太平洋戦争の起る年、中島未亡人は夫の遺骨を抱いて、中島氏の父母の郷里熊本県を訪い、中島氏の実母にもあつて、その遺骨を先祖代々の墓地に納めたのである。（…）

清子さんは太平洋戦争突発前の所謂最後の龍田丸で帰布するや、それから間もなく中島氏の遺児博人君を連れて、白木氏と再婚、後一女を得たが、今、この白木一家も、中島氏の実姉堀田一家も共にロスアンゼルスに健在である。

そして博人君も今や白木姓を名乗り、今夏六月ロサンゼルス・シチー・カレヂを卒業するそうである。（四面）

引用部の冒頭に言及のある、直人がハワイで教鞭を執つた布哇中学校は本願寺付属の日本語学校である。また、清子夫人の洋裁研究を目的とした渡米や、直人の渡米、そして、直人の事故死は、当時の『日布時事』でも報道があつた。⁽⁷¹⁾ 清子夫人の日本滞在中には、日本でもお別れ会が開催され、自身も出席した井伏が「故中島直人とタメカネ入道」⁽⁷²⁾にその様子を綴っている。事故発生時、直人は、自車に乗せた猫の頭を撫でながら、片手で運転していたようである。相手方は、ソーダ水の空瓶を運ぶトラックだった⁽⁷³⁾。また、一九四〇年十二月二十八日付『日布時事』には清子夫人が潮音詩社に宛てた謝状が掲載されている。⁽⁷⁴⁾ それによれば、直人は十二月五日に学校からの帰宅途中に交通事故に遭い、入院。一週間程は日に日に恢復に向うように見えたが、十一日に半身不随の症状が出、専門医が診たところ、

後頭部内に出血が発見された。切開手術他、手を尽くしたが、十三日午後八時、永眠したようである。満で三十六歳だった。

兄の遺骨を運んで日本に渡り、また自身も遺骨となって日本に運ばれるというのは、直人の人生を振り返ってみると、何とも言えない。先の引用にある通り、真珠湾攻撃とそれに続く太平洋戦争が勃発するのは、直人の死の翌年である。ハワイであれ、日本であれ、直人の描く思い出の向こうには、常に移民史という大きな物語があった。直人が、西海岸の、ハワイの、或いは日本に残った日系二世たちの戦争を、血の通った具体的な目を通し、小説の水準に引き上げるのを見たかったと思う。作家としてさらなる高みを目指せた人であり、残念でならない。

(三) 自筆資料

本学図書館には、直人の自筆資料が五点、所蔵されている。一点は先に紹介した『ハワイ物語』署名本である。残り四点は、逸見広宛の葉書である。一九二八年十月に、逸見が『創作時代』の月評で直人の「胡椒」と「はな子」に言及したことは、すでに触れた。これは管見の限り、直人作品についての最初の書評であり、逸見と直人の交流の長さが伺い知れる。葉書はいずれも一九三一年頃に書かれたと思われる、直人の作家時代についての自身による記述として貴重である。また、書中で言及される作品「ガイヤ号顛末記」は「ガイヤー號」として一九三五年に『早稲田文学』に掲載された直人の中編と推察される。第一次大戦中にドイツ軍艦がホノルルに入港し、国際問題に発展した「ガイヤー号事件」を題材にした作品である。ここに、各葉書を翻刻しておく。未確定の書誌情報は「」で括った他、葉書内の改行は／で示した。

①「昭和五年十一月二十四日」消印（十四×九センチメートル 葉書）

御葉書ありがたうございました。又、いろ／＼の御配慮、感謝いたします。一つ子供らし／＼いキエンを挙げれば、（笑つてはいけません）死んで／＼も小説を書きたいとおもつてゐます。／＼こんど「文学黨員」、一月から発行される由、およろこび申上げます。貴兄のメザマシイ奮闘大いに期待いたします。氏の如き先輩を持つことはわれわれのよろこびであり、力となります。大いに／＼やつて下さい。「文学黨員」二月号の創作、大いに一つふん張つて見せませう。僕達の方は二十五日に例／＼の問題の同人会があるんですよ。どうも困つたものです。そのうち、ぜひ浦上氏とお邪魔に上ります。／＼お大事に――。 匆々。

②「昭和六年」一月九日付（十四×九・一センチメートル 葉書）

その後いかがですか／＼ボク「文学黨員」二月号の原稿、遂に間に合ひませんでした。それで／＼三月号に書かせていただきます。／＼「ガイヤ号顛末記」といふのです。七十／＼枚位になるので、一応編集上の御意向きいておかないと、と思ふのですが、構／＼ひませんかしら。右、おわびとお訊ね。／＼一月九日 匆々

③昭和六年五月十八日消印（十四×九・一センチメートル 葉書）

失礼しました。「文学黨員」六月号の僕の作品、大変おくれて了つてま／＼ことに済みませんが、必ず十九日の夜か／＼二十日の早朝には高橋君から／＼ハガキがありましたやうにお宅へ、僕 持つて／＼行つてお届けしますから、それまでどうかお待／＼ち下さいませんか。四十枚を少し越える予定で／＼いま浄書中ですが大変どうもいつかお話ししたヤツが／＼書きにくくつて、出来栄えを氣遣つてゐます。では、／＼右、甚だ身勝手乍ら、お願い迄。 匆々

④昭和六年十一月二十七日消印（十四×九・一センチメートル 葉書）

先日は失礼いたしました。誰かと／思ったら氏だったので甚だ恐縮いたしました。でも思ったより色白い好男子／なのでいささかが、つかり、しましたよ。（失敬）／何分あの晩はあんな風で、僕も落ついた／気持で色々な事を話すことが出来ず、匆／々の中にお別れしなければならなかつた事はイ／カンでした。いづれそのうち、ゆつくりお会いしま^マう。／浦上氏もさういつてゐました。その後のオデキの経過／よろしいですか。僕、只今「新早文」正月号のために、／「ガイヤ号顛末記」執筆中。相当長くなりさうなので、／苦しんでゐます。お大事に、匆々。十一月二十七日

(四) 書誌

以下に、中島直人の作品一覧を付す。

〈凡例〉

- ・小説や随筆等、作品の分類は《 》で記した。ただし、ここまで見てきた通り、直人の作品には自伝的な創作も多く、便宜的な分類に留まる。
- ・未確定の書誌情報は「 ー 」で括った。
- ・再録の場合、分類の直後に「再」の字を振った。ただし、本文異同確認は未実施である。
- ・連載の場合、○囲み数字で各回を示し、続けて当該回の掲載日と掲載頁を示した。その際、年月が繰り返し返しになる場合、省略した。
- ・新聞の掲載頁は初版から採った。
- ・一覧作成に当たっては、原本調査を行った。原本調査を行えなかった書誌については、存在が言及される文献を「※」を付して、記した。
- ・その他、特記事項も「※」を付して、記した。

◆一九二八年（二十四歳）

《小説》「すゐぎゆう」『一九二八年』、一九二八年、「一九二八年社」

※原本未確認…中島直人「物を書くといふ事」『布哇報知新聞』、布哇報知社、一九三七年四月十九日、八面
《小説》「ハワイの二少年とキャンブ」『一九二八年』、一九二八年、「一九二八年社」

※原本未確認…崎山正毅他「文藝都市批判」『文藝都市』二(二)、紀伊國屋書店、一九二九年一月、七六～七七頁。部分掲載とのこと。

《小説》「はな子」『一九二八年』、一九二八年、「一九二八年社」

※原本未確認…逸見広「九月創作月評」『創作時代』二(十)、文藝連盟社、一九二八年十月、八〇頁

《小説》「胡椒」『一九二八年』、一九二八年、「一九二八年社」

※原本未確認…逸見広「九月創作月評」『創作時代』二(十)、文藝連盟社、一九二八年十月、八〇頁

◆一九二九年(二十五歳)

《小説》「狂った轉轍機(所…:ハワイ)」『重裝兵卒』二(二)、一九二九年二月、一九二八年社、三六～四二頁

《その他》「編集後記」『重裝兵卒』二(二)、一九二九年二月、一九二八年社、八六頁

※杉齊一と連名

《小説》「帰つて来た私達」『重裝兵卒』二(二)、一九二九年四月、一九二八年社、六二～八六頁

《小説》「編集後記」『重裝兵卒』二(三)、一九二九年七月、一九二八年社、六二頁

※北見嗣二、杉齊一と連名

《小説》「布哇生れの感情」『文藝都市』二(七)、一九二九年七月、紀伊國屋書店、一〇八～一二六頁

《その他》「布哇が生んだ小説家／故国文壇に出ず／作品を通じて生まれ故郷の／布哇を紹介したいと云ふ」／中島

直人君の此意気込込」『日布時事』、一九二九年十月二十二日、「日布時事社」、五面

《小説》再「帰つて来た私達」『日布時事』、一九二九年十月～十二月、「日布時事社」、①一九二九年十月二十四日七面、②二十五日九面、③二十六日七面、④二十八日七面、⑤二十九日九面、⑥三十日七面、⑦三十一日九面、⑧十一月一日七面、⑨二日七面、⑩四日七面、⑪五日九面、⑫六日九面、⑬七日七面、⑭（本文⑬）八日九面、⑮（本文⑬）九日七面、⑯（本文⑬）十一日七面、⑰（本文⑮）十二日七面、⑱（本文⑯）十三日九面、⑲（本文⑰）十四日七面
《小説》「ヤキ團子」『日布時事』、一九二九年十一月、「日布時事社」、①一九二九年十一月二十日九面、②二十一日七面、③二十二日九面、④（本文③）二十三日七面

※②は最終十一行削除

《小説》再「狂つた轉轍機」『日布時事』、一九二九年十一月～十二月、「日布時事社」、①一九二九年十一月二十五日九面、②二十六日九面、③二十七日九面、④二十八日七面、⑤二十九日七面、⑥三十日七面、⑦十二月二日「九面」

◆一九三〇年（二十六歳）

《小説》再「すみぎゆう」『日布時事』、一九三〇年一月、「日布時事社」、①一九三〇年一月十九日六面、②二十六日九面

《小説》「山の手ハウス」の外交員」『新早稲田文学』一（二）、一九三〇年十月、新早稲田文学社、四六～五九頁

《小説》「ハワイの二少年とキャンプ」『新早稲田文学』一（二）、一九三〇年十一月、新早稲田文学社、二～二八頁

※目次上は「ハワイの二少年とキャンプ」。

《小説》「Miss Hookanoの鞭」『新科學的文藝』一（五）、一九三〇年十一月、紀伊國屋書店、三八～六一頁

《小説》「Miss Hookanoの鞭」『新科學的文藝』一(六)、一九三〇年十二月、紀伊國屋書店、一九〇三九頁

◆一九三一年(二十七歲)

《小説》「トム・ガン時代」『文學風景』二(二)、一九三二年二月、天人社、七七〇九五頁

《小説》再「狂った軋轍機(所……ハワイ)」『新科學的文藝』二(三)、一九三二年三月、紀伊國屋書店、四七〇五二頁

《その他》「私は推薦する」『近代生活』三(六)、一九三二年六月、近代生活社、三八頁

《小説》「昼食時間」——それはいつも僕に取つて一つの出来事であつた——『新科學的文藝』二(六)、

一九三二年六月、紀伊國屋書店、五五〇七三頁

《隨筆》「布哇と書物の回想」『東京堂月報』十八(十五)、一九三二年九月、東京堂、三〇五頁

《小説》再「すゑぎゆう」——これはハワイの小話にすぎませぬ——『新科學的文藝』二(十二)、一九三二年

十一月、紀伊國屋書店、四三〇四九頁

《小説》「夢を見る僕」『作品』二(十二)、一九三二年十一月、作品社、七三〇九三頁

《隨筆》「同人雜誌管見(其二)」『東京堂月報』十八(二十)、一九三二年十一月、東京堂、三〇五頁

《隨筆》「同人雜誌管見(其三)」『東京堂月報』十八(二十二)、一九三二年十二月、東京堂、四〇五頁

《隨筆》「同人雜誌管見(其四)」『東京堂月報』十八(二十三)、一九三二年十二月、東京堂、二〇五頁

《小説》「二度目に布哇へ行つたら」——一名、四月一日の怪——『文學時代』三(十二)、一九三二年十二月、

新潮社、一二六〇一三三頁

《隨筆》「バナナ遊戯」『文藝汎論』一(四)、一九三二年十二月、文藝汎論社、二六〇二七頁

《小説》再「二度目に布哇に行ったら——一名、四月の怪——」『日布時事』、一九三一年十二月十三日、「日布時事社」、七頁

◆一九三二年（二十八歳）

《小説》再「やきだんご」『新科學的文藝』三（二）、一九三二年一月、新科學的社、二五～二九頁

《小説》「密航」『セルパン』（十二）、一九三二年一月、第一書房、一一一～一二三頁

《小説》再「布哇生れの感情」『年刊小説』（詩と詩論）別冊）、一九三二年一月、厚生閣書店、一九七～二二七頁

《小説》再「胡椒」『文學クオタリイ』（二）、一九三二年二月、大盛堂書店、三七八～三八一頁

《隨筆》「海路歷程」と『ユリシイズ』評』『書物展望』二（三）、一九三二年三月、書物展望社、四九～五三頁

《小説》「何をいひ出すか分らぬ話」『文藝汎論』二（三）、一九三二年三月、文藝汎論社、八～九頁

《小説》「榎の悲劇」『新科學的文藝』三（五）、一九三二年五月、新科學的社、六～一一頁

《小説》「無作法な男」『近代生活』四（四）、一九三二年五月、近代生活社、五四～五七頁

《隨筆》「金谷完治君」『新科學的文藝』三（六）、一九三二年六月、新科學的社、五一～五三頁

《小説》「遊ぶ仔犬——これは田舎への感想です——」『文學クオタリイ』（二）、一九三二年六月、文學クオタリイ社、二六一～二六七頁

《その他》「文芸汎論——一週年記念に際して寄せられたる諸家の感想（その二）」『文藝汎論』二（九）、一九三二年九月、文藝汎論社、九～一〇頁

◆一九三三年（二十九歳）

- 《小説》「再「すみぎゆう」」『大南洋評論』一（二）、一九三三年五月、大南洋社、七九〜八二頁
《隨筆》「ハワイ行き」『文藝汎論』三（七）、一九三三年七月、文藝汎論社、一九〜二二頁

◆一九三四年（三十歳）

- 《小説》「ワイアワ駅」『文學界』二（二）、一九三四年二月、文化公論社、四六〜八二頁

※目次上の開始頁は四〇頁。

《その他》「何故書くか」『鶴』二（一）、一九三四年四月、鶴社、一六三頁

- 《隨筆》「河田君と思ひ出の一夜」『桜』二（三）、一九三四年四月、近藤書店、一一〇〜一二四頁
《小説》「途上で——」『早稲田文学』第三次一（七）、一九三四年十二月、早稲田文学社、一五五〜一七三頁

◆一九三五年（三十一歳）

《小説》「写真祭の女」『蠟人形』六（二）、一九三五年一月、蠟人形社、七〇〜七五頁

《小説》「椿の花」『シルヴァ』二（六）、一九三五年三月、起山房、四〜五頁

《小説》「アロハ・オエー」『若草』十一（五）、一九三五年五月、宝文館、三二〜三八頁

《小説》「ガイヤー號」『早稲田文学』第三次二（五）、一九三五年五月、早稲田文学社、一四七〜一七九頁

《小説》「森の学校」『作品』六（七）、一九三五年七月、作品社、三二〜四三頁

《小説》「キビ火事」『文藝』三（八）、一九三五年八月、改造社、二〜二六頁

《小説》「汽車の旅」『若草』十一（七）、一九三五年十月、宝文館、二八五～二八九頁

《隨筆》「小染の事など」『木靴』一（二）、一九三五年十月、文体社、六八頁

《隨筆》「真珠湾のほとり」『都新聞』、一九三五年十一月、都新聞社、①一九三五年十一月二十四日一面、②二十五日一面、③二十六日一面

《隨筆》再「真珠湾のほとり」『布哇報知』、一九三五年十二月、布哇報知社、①一九三五年十二月二十一日八面、

②二十八日八面

◆一九三六年（三十二歳）

《小説》「ハワイ短編集」『木靴』二（二）、一九三六年一月、文体社、二四～四〇頁

※「すみぎゆう」「胡椒」「カナカ」収録。「カナカ」のみ初出。

《小説》「春の訪れ」『若草』十二（三）、一九三六年三月、宝文館、五九～六一頁

《小説》「少年と少女達の話 —— 所はハワイ ——」『蠟人形』七（三）、一九三六年三月、蠟人形社、七五～七九頁

※「ヤキ團子」の改変。

《小説》再「少年と少女達の話」『日布時事』、一九三六年三月～四月、「日布時事社」、①一九三六年三月三十日七面、
②四月七日一〇面

《隨筆》「赤瓦」の人種」『文学生活』一（二）、一九三六年六月、主張社、七三～七七頁

《小説》「磔」『早稲田文学』第三次三（七）、一九三六年七月、早稲田文学社、一三九～一五五頁

《小説》「メモリアル・デー」『若草』十二（七）、一九三六年七月、宝文館、二〇～二六頁

《随筆》「第二世留學生の悩み」『改造』一八（八）、一九三六年八月、改造社、一六～二三頁

《その他》「文学生活座談会」『文学生活』一（三三）、一九三六年八月、主張社、六七～八三頁

《小説》「野川の歌」『文筆』一（二）、一九三六年九月、砂子屋書房、六～一二頁

※「母の日曜日」「無作法な男」収録。「母の日曜日」のみ初出。

《単行本》『ハワイ物語』、一九三六年十二月、砂子屋書房

《その他》「龍田丸船客談／生れ故郷布哇を視に来た／二世作家中嶋直人氏／六ヶ月滞在して各島を廻る」『日布時事』、一九三六年十二月二十六日、「日布時事社」、五面

◆一九三七年（三十三歳）

《随筆》「十九年振りのハワイ」『日布時事』、一九三七年一月一日、「日布時事社」、七面

《随筆》「作家の覚悟」『布哇報知』、一九三七年二月六日、布哇報知社、八面

《随筆》「歳月は流れたり」『日布時事』、一九三七年三月～四月、「日布時事社」、①一九三七年三月二十三日七面、

②二十四日六面、③二十六日六面、④二十七日六面、⑤三十日六面、⑥三十一日六面、⑦四月三日七面、

⑧五日七面、⑨七日七面、⑩八日五面、⑪九日六面、⑫十日八面、⑬十三日五面、⑭十六日五面

《随筆》「文学と私の場合」『布哇報知』、一九三七年三月二十七日、布哇報知社、八面

《随筆》「物を書くといふ事」『布哇報知』、一九三七年四月十九日、布哇報知社、八面

《随筆》再「物を書くといふ事」『加州毎日新聞』、一九三七年五月、加州毎日新聞社、①一九三七年五月二日四面、

②九日四面

※回表記なく分載。初回到『日布時事』から再録の由。正しくは『布哇報知』か。

《随筆》「作家生活の側面図」『布哇報知』、一九三七年八月二十六日、布哇報知社、八面

◆一九三九年（三十五歳）

《随筆》「思い出の場末」『日布時事』、一九三九年一月、「日布時事社」、①一九三九年一月一日六七面、②四日六面、

③六日八面、④十日七面、⑤十六日七面、⑥十八日六面、⑦二十日八面

《その他》「アロハ」『日布時事』、一九三九年九月八日、「日布時事社」、二面

《その他》「ゴシップ／ハワイ恋し／の直人さん」『日布時事』、一九三九年十一月二日、「日布時事社」、八面

◆一九四一年（没後）

《随筆》再「思ひ出」『加州毎日新聞』、一九四一年一月五日、加州毎日新聞社、三面

※「歳月は流れたり」⑬と⑭の再録。記者注として「アメリカに於ける日本人の生活を小説に現はしたいと心がける人々の参考に供したい」由。

◆不明

《小説》「ワイアワの池」

※原本未確認…中島直人『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六年、三四九頁

《小説》「崖のあるワイアワ風景」

中島直人 —— あるハワイ日系二世作家の生涯と作品 ——

※原本未確認…中島直人「歳月は流れたり」⑧、『日布時事』、『日布時事社』、七面

注

- (1) 名前の読みについては、ハワイで刊行されていた各種の邦字新聞（英語版）に依った。『日布時事』一九四〇年十二月十六日十二面などを参照されたい。
- (2) 『朝日新聞』一九三四年十一月二十八日九面に、伊藤整が「特殊境の諸作／中堅作家の危機」と題した文芸時評を掲載し、その中で直人について言及している。本文で見えてゆくことになるが、当時、他の作家による直人への言及は少なく、帰布後、忘却されてしまったと言わざるを得ないものの、作家として十分に認知されていたと思われる。
- (3) 中島直人『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六年
- (4) 当時のハワイにおける邦字新聞の代表格としては『日布時事』と『布哇報知』がある。太平洋戦争勃発後、全ての邦字新聞は一時休刊となるが、この二紙は間もなく刊行再開となった。以下のデータベースで閲覧可能である（『布哇報知』については、スタンフォード大学関係者以外は検索のみ）。ハワイ刊行のものに留まらず、多数の邦字新聞を含み、有益である。Hoover Institution, "Hoji Shinbun Digital Collection," <https://hojishinbun.hoover.org/?a=p&p=home&e=-----en-10-1-img----->.
- (5) 本論では家族に触れる機会も多い為、以降、直人と下の名で表記する。
- (6) 『望郷のハワイ——二世作家中島直人の軌跡』ジャパニーズ・アメリカ、新曜社、二〇一四年、二六三～二八七頁
- (7) 『コレクション・モダン都市文化』第九十二巻、ゆまに書房、二〇一三年
- (8) 「ポトル・メッセージはどこに配達されたか…中島直人「布哇生まれの感情」を読む」『鳴門教育大学研究紀要』（三十六）、二〇一二年三月、一九七～二〇八頁
- (9) ここまで、川添善市『移民百年の年輪』、移民百年の年輪刊行会、一九六八年、三三四～三三六頁
- (10) 『日布時事』、一九三七年三月二十四日、六面
- (11) 『日布時事』、一九二九年十一月五日、七面
- (12) 川添善市『移民百年の年輪』、移民百年の年輪刊行会、一九六八年、三三五頁

(13) ワイアワへ越してくる時期を題材にした短編に「キビ火事」がある。掲載誌が『文藝』ということもあり、大手新聞の書評にも取り上げられた。視点人物は長女で、大雨の中、中島家がワイアワのぼろやに越してくる。隣接する家には日本人の寡黙な老人が一人で住い、さらにその隣の納屋では、パールハーバーに浮かぶ向島より、朝から大人たちが集まり、賭場を開いている。長女は老人、そして海岸でたむろする博徒の子供たちと交流を深める。明言はされぬが、老人は、過酷な労働環境を経験した初期の移民であり、子供たちをネグレクトして博打に耽る新しい移民たちとは一線を画している。そして、ある夜、向島が火事になる。長女の父が、単独で渡航するが、火は収まる気配がなく、焼死体が見つかるばかりである。後日、子供たちのみ無事に発見され、長女との交流が継続される。同時に、老人が忽然と姿を消しているのが判明する——。本田顕彰は『朝日新聞』の文芸時評にて、同作の「絶望」について「真暗」で「ハワイ在留の貧困のどん底に陥つたすすんだ生活をとはして見たもの」と評している（『絶望の文学』『朝日新聞』一九三五年七月二十九日九面）。

(14) 中島直人『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六年、三〇四頁

(15) 中島直人『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六年、五六頁

(16) 中島直人『ハワイ物語』砂子屋書房、一九三六年、一四四―一四五頁

(17) 紙幅に限りがあり、本文には含まれないが、「ハワイの少年とキャンプ」にも触れておきたい。部分的な初出は「一九二八年」とされるが、全文は『新早稲田文学』一（二）に掲載された（一九三〇年十一月、二―二八頁）。本作も『ハワイ物語』収録作である。直人が六学年を終えた夏休みに、友人熊夫とマウカと呼ばれる地域のバイナツプルプランテーションに季節労働に出る。物語的な起伏はないが、当地での夏の日々の描写が極めて魅力的である。当時、バイナツプル産業は日系人たちの投機対象だった。サトウキビプランテーションでの契約労働で得た資金等で土地を借り、缶詰会社等と契約の上、収穫物を納品した。最盛期の夏になると、多くの季節労働者がキャンプに集まった。本作で描かれるキャンプにはホルルの大学生たちも来ており、文字通り、毎夜、サマーキャンプの様相となる。季節労働者たちは、焚火を囲みながら、音楽を演奏し、踊り、その他、様々な趣味の会も催される。缶詰工場の労働者が基本的に女性である点や、オキナワンとその他の日系人との距離感、キャンプ内の銭湯、独身者用の食堂等、歴史的事実が一個の生きた空間として描かれ、直人の持ち味が存分に発揮されている。

(18) 『東京堂月報』十八（十五）、一九三二年九月、東京堂、三〇五頁

- (19) 『東京堂月報』 十八(十五)、一九三二年九月、東京堂、四頁
- (20) 『東京堂月報』 十八(十五)、一九三二年九月、東京堂、四頁
- (21) 一九一七年九月十五日から一週間掲載され、署名には直人の名もある。「長男茂／葬送の際は御多忙中にも不拘遠路態々御會葬被下奉深謝候實は一々參堂御禮申述べき筈の處混雜中御尊名伺洩も難計候間乍略儀以紙上御禮申上候／父 中島直彦／弟中島直人(…)」(十五・十七日〓三、十八〓二十日〓四、二十一・二十二日〓五面)。
- (22) 『文学生活』 一(一)、一九三六年六月、主張社、七三〓七七頁
- (23) 『重裝兵卒』 二(二)、一九二九年四月、一九二八年社、六二〓八六頁
- (24) 『早稲田文学』 三(七)、一九三六年七月、早稲田文学社、一三九〓一五五頁
- (25) 『早稲田文学』 三(七)、一九三六年七月、早稲田文学社、一三九頁
- (26) 『早稲田文学』 三(七)、一九三六年七月、早稲田文学社、一四二頁
- (27) 『新科学的文藝』 三(五)、一九三二年五月、新科学的社、六〓十一頁
- (28) 吉田亮編著『アメリカ日系二世と越境教育…一九三〇年代を主にして』(不二出版、二〇一二年)に詳しい。特に、ハワイへの移民が多かった熊本では、熊本海外協会という組織がパイプ役として寄与し、いち早く制度を整えた。ライフスタイルの違いに配慮した寮の設置や、まさに直人が経験したことだが、九月／四月という学期開始月の違いを活用した補習教育などである。住宅については、親類を頼る例も多かったようである。本学も二世向けの教育機関として、一九三五年、高田馬場に早稲田国際学院を設置した。同種の教育機関としては最大規模だった。建前上は奉仕園の経営だったが、実質的には早稲田大学の付属機関で、大学の講師陣が教育を施した。
- (29) 『改造』 一八(八)、一九三六年八月、改造社、一六〓二三頁
- (30) 『布哇報知』、一九三七年二月六日、布哇報知社、八面
- (31) 『書物展望』 二(三三)、一九三三年三月、書物展望社、四九〓五三頁
- (32) 『書物展望』 二(三三)、一九三三年三月、書物展望社、四九頁
- (33) 『布哇報知』、一九三七年四月一九日、布哇報知社、八面

- (34) 『文藝都市』二(一)、一九二九年一月、紀伊國屋書店、七六～七七頁
- (35) 『創作時代』二(十)、一九二八年十月、文藝連盟社、七八～八二頁
- (36) 『創作時代』二(十)、一九二八年十月、文藝連盟社、八〇頁
- (37) 『創作時代』二(十)、一九二八年十月、文藝連盟社、八一頁
- (38) 本論執筆時点での所蔵号は以下の通りである。『1928』一号・二号・三号、『1929』十六号・十九号・二十号、『1930』二十四号。
- (39) 『1928』(四)、一九二八年六月、創元社
- (40) 『重裝兵卒』二(二)、一九二九年四月、一九二八年社、一〇九頁
- (41) 本論執筆時点での所蔵号は二(一)通号八、二(二)通号九、二(三)通号十である。
- (42) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五二二頁
- (43) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一〇～五二二頁
- (44) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一一頁
- (45) 『日布時事』、一九二九年十月二十二日、五面
- (46) 『日布時事』、一九二九年十月二十二日、五面
- (47) 後に引くこととなるが、直人が帰布した際『日布時事』に「龍田丸船客談／生れ故郷布哇を觀に來た／二世作家中嶋直人氏／六ヶ月滞在于各島廻る」という記事が載る。一九三六年十二月二十六日付である(五面)。直人は同記事中で、簡単なインタビューに答えており、自身の作家生活を「約十ヶ年」と表現している。一九二八年デビューは本人の談であり、満で数えれば、本記事刊行後、間もなく年が変わった翌一九三七年のおそらく四月で、九年になるはずである。本記事にも「数え年十四の時日本へ帰り」とあるが、自身の帰国時の年齢は、管見の限り、いつも数えて表現しており、初年を数える習慣が残っているのではないかと思う。
- (48) 『文学クオタリイ』(二)、一九三三年六月、文学クオタリイ社、二六一～二六七頁
- (49) 早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第四卷、早稲田大学出版部、一九九二年、六九八頁

- (50) 『新科学的文藝』二(九)、一九三二年九月、紀伊國屋書店、五八―五九頁
- (51) 『浅見淵著文集』第一卷、河出書房新社、一九七四年、九三―九六頁
- (52) 同書出版の際には、記念祝賀会が開かれ、直人も参加している。一九三六年十月十八日のことで、会場は上野池之端一平荘。「盛会で非常に楽しい和やかない会であつた」(山崎剛平)とのこと。お開きは十一時。以下を参照のこと——山崎剛平「浅見淵著評論集／出版記念祝賀会(その一)」及び尾崎一雄「中秋池畔宴(その二)」。どちらも『文学生活』一(六)、一九三六年十二月、砂子屋書房、一〇七―一〇九頁 ※『文学生活』は本号で『文筆』と合併し、版元を砂子屋書房に移した。
- (53) 『文学生活』二(二)、一九三七年二月、砂子屋書房、七一―七十二頁
- (54) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一〇頁
- (55) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一―頁
- (56) なお、「帰つて来た私達」の連載調整に合わせ、井伏も「誰その池」という作品を『日布時事』に送つたようである。こちらは未掲載となつており、直人が今度こそ本当に帰布した際に書かれた随筆「海路の日和」には「ハワイで中島君が日布時事の社長に会ふ機会があつたなら、原稿を掲載するやうに催促していただきたい。原稿料は至急郵送してもらひたい。忘れないうやうに頼む」とある(『文学生活』一(六)、一九三六年十二月、砂子屋書房、七九頁)。
- (57) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一三―五一四頁
- (58) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五一三頁
- (59) 『井伏鱒二全集』第一卷、筑摩書房、一九九六年、五二三頁
- (60) 『文学生活』二(二)、一九三七年二月、砂子屋書房、七六―八三頁
- (61) 尾崎一雄『尾崎一雄全集』第十四卷、筑摩書房、一九八五年、四三七頁
- (62) 出發港については、川崎長太郎「『ハワイ物語』のこと」に「君(＝直人・著者注)は臨港列車に乗り遅れひと汽車あとで横濱埠頭につけたと云ふ」と見える他、横浜だったようである(『文学生活』二(二)、一九三七年二月、砂子屋書房、七一頁)。
- (63) 『日布時事』、一九三六年十二月十一日、六面
- (64) 『日布時事』、一九三六年十二月二十六日、五面

- (65) 第二次世界大戦中のハワイについては、島田法子『戦争と移民の社会史…ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』（現代史料出版、二〇〇四年）を参照のこと。
- (66) 『日布時事』、一九三六年十二月三十日、三面
- (67) 『日布時事』、一九三七年一月一日、七面
- (68) 『日布時事』、一九三七年五月十日、三面
- (69) 『日布時事』、一九三七年一月、①九日七面、②十三日五面、③二十三日七面
- (70) 『布哇タイムズ』、一九六二年六月五日、四面
- (71) 清子洋裁留学については一九三九年六月三十日六面、直人渡米については一九三九年八月三十日四面、一九三九年九月七日四面。また、一九三九年九月八日二面には、直人の署名で次の通り、出発の挨拶広告が掲出されている。「アロハ／ハワイ滞在中は大へん御厚情に預かりました、本日のラーリン号で渡米いたします、いろく有難う御座いました、皆様のご健康を祈ります さようなら／中島直人」。また、直人の死去については、一九四〇年十二月十四日四面、一九四〇年十二月十八日三面、一九四〇年十二月二十八日六面。一九四一年一月三十一日三面には、友人有志による追悼会開催の広告も出ている。
- (72) 『井伏鱒二全集』第九卷、筑摩書房、一九九七年、四九四～五〇〇頁
- (73) 『井伏鱒二全集』第九卷、筑摩書房、一九九七年、四九六頁
- (74) 『日布時事』、一九四〇年十二月二十八日、六面
- (75) 『早稲田文学』五月号、一九三五年五月、早稲田文学社、一四七～一七九頁

（くわがき こうへい 高田早苗記念研究図書館担当課）

（了）